

## <エッセイ : 小特集「私にとっての日文研と日本研究」>世界の日本研究とふれあって

著者	井上 章一
雑誌名	日文研
巻	50
ページ	16-21
発行年	2013-03-29
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00004125">http://doi.org/10.15055/00004125</a>

## 世界の日本研究とふれあって

井上章一

アルゼンチンに『太平記』へいどむ研究者がいるかどうかを、私はよく知らない。だが、そういう人とお目にかかれれば、まずそのかたをうやまうと思う。世界には奇特な人がいるものだなあと、感心するだろう。あるいは、トルコで運慶をおいかけているという人にであつても、脱帽するにちがいない。

よくもまあ、遠い日本の、そんな古い話に心をよせられたものだ。ありがたい人であるという気持ちだが、いやおうなくこみあげてくるはずである。

だから、そういう人々から何かをたずねられれば、手助けのひとつもしてあげたくなる。ああ、そんなことをしらべたいのなら、あそこの図書館へいけばいい。あの古本屋が、おさがしの本をけっこうそろえているよ、等々と。

そして、国際日本文化研究センターじたいが、こういう想いにささえられなりたつた。日本文化研究へおもむく海外の研究者たちは、何かと不自由をしいられているだろう。遠い日本の情報がなかなか入手できず、苦勞をしているのではないか。そんなこちら側の想像もはたらいで、できた研究所なのである。われわれがつとめているこの職場は。

運慶研究にとりくむトルコ人はありがたく見えると、今書いた。しかし、ミケランジェロ研究にいそしむ日本人を、イタリアの学界はうやまうまい。遠くはなれた日本人が、ルネッサン

スに関心をいだく。それをめずらしがったりはしないと思う。

ミケランジェロやルネッサンスは、国際的に興味をもたれている。世界共通の研究テーマである。イタリアの学界人なら、おのずとそううけとめていよう。そこへ外国人が参入してきても、なんら不思議には思わない。じっさい、ルネッサンスをてがける研究者の過半は、アメリカの学者であると聞く。

イタリアの研究者は、だからミケランジェロ研究の日本人をたすけようと、思わない。すくなくとも、その援助を組織化しようとはしないだろう。国際イタリア文化研究センターをつくろうという構想などは、うかびあがるはずもない。

国際日本文化研究センターは、世界中の日本研究者につながろうとしてきた。諸外国にはどういう研究者がいて、今何をおいかけているのか。その現状を、できるかぎり把握しておこうとしてきた。

そんなまぐろみをいだいたのは、とりもなおさず、海外の日本研究者が少ないからである。こちらでがんばれば、世界の全体像がつかめるかもしれない。ついつい、そう思わせてしまうくらいに、数がかぎられている。だから、このとりくみははじめられた。もちろん、諸外国における日本研究の動向を、おいかけようとするところも。

だが、イタリアには、それがのぞめない。世界にちらばるルネッサンス研究者だけにかぎっても、全体的な把握は無理である。ひょっとしたら、ミケランジェロだけの場合でも、むずかしいかもしれない。

ローマ考古学やカトリック研究、オペラ学にまで範囲をひろげれば、話ははっきりする。海外でくらすすべてのイタリア研究者と、一研究機関が接点をもつことは、ありえない。国際イ

タリア文化研究センターはなりたちえないと、そう考えるゆえんである。

イタリアだけに、ことはかぎらない。フランスやドイツ、そしてイギリスでも、似たようなことは言えるだろう。仏文研も独文研も英文研も、とうてい運営しきれない。日文研は、なんとかなるが。

国際日本文化研究センターは、一九八七年に設立された。いわゆるバブル時代、日本経済が好景気にわいていた時代の、そのたまものである。あの時代だから、こういう組織もつくるこ

とができたのだと、一般的にはみなされていよう。

しかし、もうひとつ見おとしてはいけない側面がある。

海外で日本文化研究にすむ人は、数がかぎられていた。日本側の努力しだいでは、その全員とコンタクトがもてるかもしれない。そういう幻想がいただけことも、われわれがつとめるこの組織を、うかびあがらせた。そのこともまた、かみしめておくべきだろう。

日本文化研究は、世界的な学術の檣舞台にあがってこなかった。人文社会諸学のなかでは、かたすみのほうに席をあたえられている。辺境的な分野だと、みなされてきた。だから、われわれの研究所は、つくられたのである。

国際的な学術世界では、辺境地におかれている。だが、国じたいにはいきおいがあり、景気もよかった。その両面がかさなりあったところに、この研究所は浮上したのである。バブル期の好景気だけのことあげるのは、話がかたよっている。

国際日本文化研究センターは、日本研究の世界的な普及をねがっている。海外の学界でも、日本研究が大きくあつかわれることを、のぞんできた。そのために普及啓蒙活動をくりひろげてきたのである。

だが、日本研究が国際的な場でメインストリームをあゆみだせば、どうなるか。こたえは、あきらかである。海外の日本研究者を支援したりすることは、とうていできなくなる。イタリアが、世界のイタリア文化研究を支援しきれない。それと同じ状況を、われわれの研究所もむかえることとなる。つまりは、仕事の停止へとおいこまれてしまうのだ。

そう、われわれの研究所がかかえるところざしは、われわれの消滅をもとめている。今は、われわれが世界の日本研究者をささえることが、まだできる。そして、そんなみみっちい状態からは、脱却したい。われわれなどが意味をなさなくなるほど、日本研究を普及させていこう。原理的には、そうやって自壊の途をあゆむことが、もとめられているのである。

しかし、われわれはうすうす知っている。日本文化研究が、世界のメインストリームをいくことは、たぶんないだろうことを。運慶がミケランジェロにおくおよばないことにも、気づいている。

そして、たちうちができないという安心感によりかかり、われわれは組織をたもってきた。トルコの運慶研究者に、支援の手をさしのべたりすることもできる。そこを手がかりとしながら、給料をもらってきたのである。

『太平記』や運慶の研究が、世界の檜舞台に上がらないことを、なげくべきではない。それらは辺境におかれているから、われわれの仕事は仕事として成立する。給料もまた、いただくことができるのである。

このごろは、大学の研究にも社会的な意義がもとめられるようになってきた。その研究は、どういう意味において、社会貢献をはたしているのか。その説明をしてほしいと問われることがふえていると聞く。

人文社会諸学でも、その対応におわれているのが現状であるらしい。じっさい、自分たちはこういうところで役に立っていると言いつけるむきも、いるという。

私は大学と大学院を、工学部ですごしてきた。だから、その先生方が文系の学問をどういう目でながめているかも、よく知っている。彼らは、基本的に役立たずの穀潰しとして、こちらをとらえているのである。いくら社会貢献を揚言しても、ちゃんちゃらおかしいというけとめるにちがいない。

私じしん、穀潰しとなることにあこがれて、こちらのほうへうつってきた。社会貢献なんて、うんざり。一好事家として、おもしろいしらべものにうつつをぬかしたい。そうねがって、工学をすてたのである。自らすすんで、社史編集室への配置転換をねがう社員のように。

だが、その人文が、ちかごろは社会的に役立つかのようなふりをさせられている。のみならず、本気でそれをめざすむきも、ちらほら見かけるようになってきた。こまったことである。なんのために、文転してきたのかわからない。

いくら、社会貢献ができるようによそおっても、工学部はそれを真にうけないだろう。鼻であしらうような気がする。私には、だから社会貢献を言いつける努力が、むなしく見える。

まあ、学術予算などの割り振りなどで、人文学をかえることはできるのかもしれない。社会貢献をうたえる分野に変貌できる可能性が、まったくないわけではないだろう。工学部方面から、文系もこのごろは生まれかわったなと言ってもらえるように。

しかし、人文がそんな分野になってしまうのなら、私がとどまる意味はない。新たな穀潰しの途をもとめて、すみなれたところをはなれるのみである。

アルゼンチンで『太平記』を読む研究者に胸をうたれると、はじめに書いた。それは、今の

べたことともかわりあう。

おそらく、そういう研究者は本国で、暇人だとみなされているだろう。学界のメインストリームとはまったく関係がないテーマを、おいかける。自分だけの興味で勉強をしている、世捨人のようにあつかわれているかもしれない。その度合いは、日本で『太平記』を読む国文学徒がこうむるあつかいより、ひどかろう。

だが、それでもめげずに、『太平記』を読みつづける。『太平記』は、まあともかくとして、自分の日本研究をすすめていく。われわれは、国際日本文化研究センターで、そういう人たちともであっている。

私は、彼らからはげましてもらっているように、感じなくもない。べつに、ハデな社会貢献なんか、できなくともいいじゃあないか。ゆっくり時間をかけて、私たちの仕事をみがいしていきましょうよ、と。

（国際日本文化研究センター教授）

## 世界が日本を見つめている——傷ついたアイデンティティから

磯 前 順 一

二〇一二年は、筆者にとって海外での研究活動をおこなう機会に恵まれた年であった。スイ